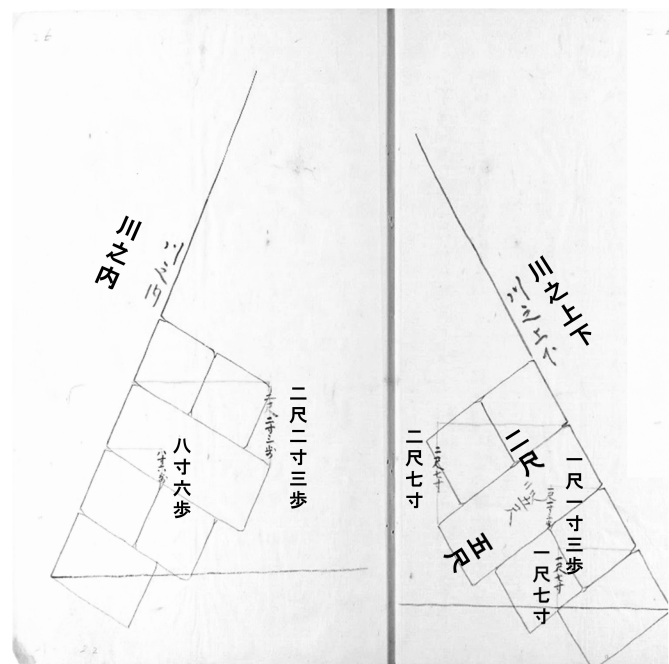
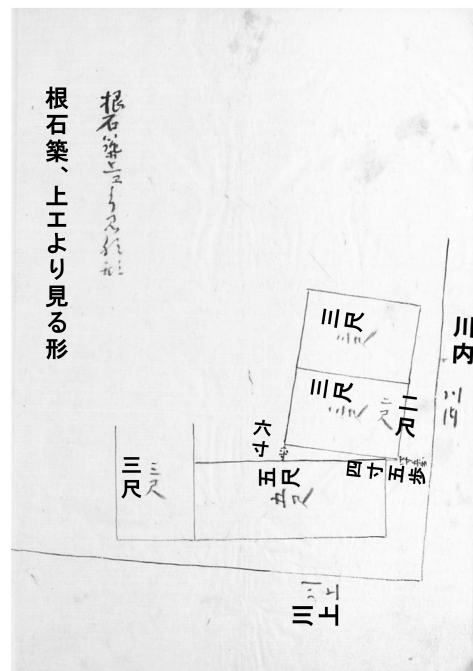


鞘石垣の隅四ヶ所有、此隅石念を入れること也、築石同角にして長さ五尺打違に築、石垣石二尺角、下段の勾配 根石一間分の割 石の尻一尺一寸三步低く故、地震にも石垣の面引込ミかつてに成る、割合左の図のとふり、

(挿絵十六)



(挿絵十七)

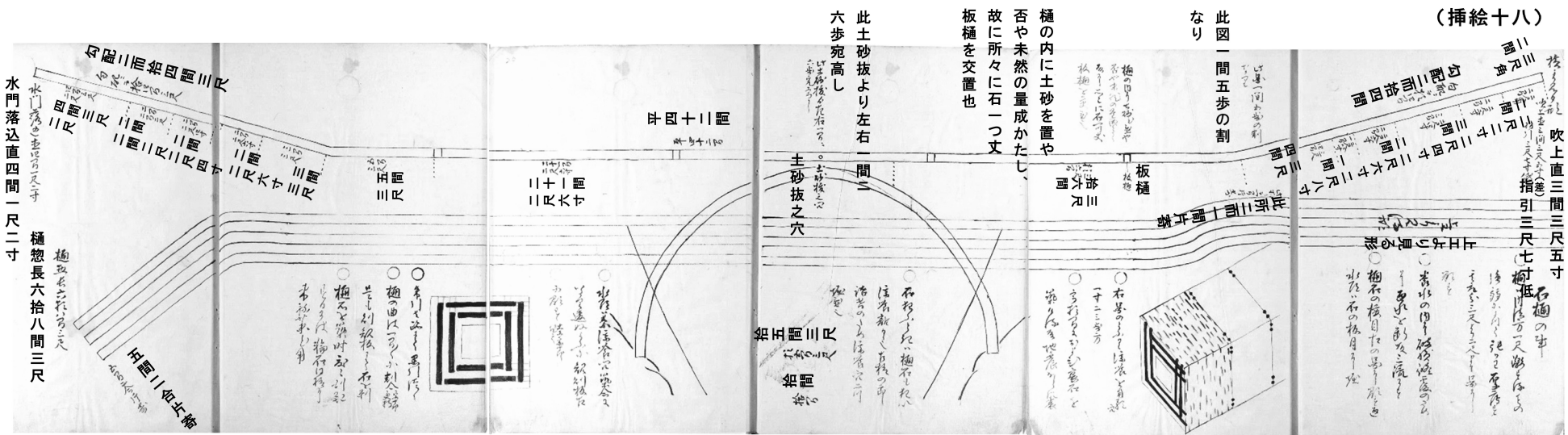


○裏築のこと、丸石者強テ用へからず、割石三、四合已上を根一ツ々々に組合、片踏、又ハ角にて築合せぬよふに深心を用へし、亀略なるときハ前条のとふりにて、石垣の狂に至る、第一者裏築高拾一間のうへに接互ル石樋聊も狂ふときハ漆喰離、通水しかたき故、重疊念を入れる事也、

○地橋崩しハ上段の柱、中英の柱五、六寸伐下、夫より双方のよふに伐下ケ、一牀に弛ミし時、石屑の懸を落、猶中英より双方のよふに二尺計伐とり、夫たけ一統に下りしうへ、柱四、五本に成よふ貫を伐、夫たけ外の柱や貫に障らぬよふに、かくらさんにて巻落す、是は津留村五兵衛受持て工風をす、

横より見る形

(挿絵十八)



石樋の事

○樋ハ内法方一尺、激することの強弱によつて、張りわ厚薄す、其取分三尺より二尺まで、図に頭す、

○養水の内に破損修覆のために通水を断故、三流にす、

○樋石の接目、左の図に頭す通、水道ハ石の板目に堀、

○右図のとふり漆喰を用る穴一寸二、三步方

○高拾間におよひ裏石を築ける故、地震などに裏

○石狂ふときハ、樋石も狂い漆喰離るゝ也、左様の節、詰替のため漆喰穴二ツ堀置也、

○水道ハ素、漆喰穴築合にいたり違ぬよふに、規則板、左に頭す、
大工宗十郎作

○朱引者跡にて黒引つく、

○樋の曲は、一間々々に割合是も則規板にて石を剥、

○樋石を築時、度々剥難するには、輪石同様に束ね藁を用、

宗十郎受持

漆喰の事
前文の通り種々様々の試、一つとして行れかたく、後道の仕法、左のことし

土五合

干て能乾たるを合する事、豊後府内初瀬井手之伝なり、坂梨某選られしに、初瀬流の干土、臼にて搗、ふるひを通たるよし、夫故歟、三十年も経て灰氣替らぬとの事也、よつて土は、漆喰に用来る上段を選、干て臼搗ふるひを通す、

白灰式升

焼灰拾月を過しハ、灰氣もとり不宜、故に日数五十日位

(下マ) 成るを用との儀、御左官手の説によつ、焼立五十日位を用、砂壺升八合

水源遠く急流の洲にて取、塊の交や否やハ桶にてとき、汁にこりなきときハ真の砂也、夫を用、是も御左官手の説也、

塩壺合

松葉汁

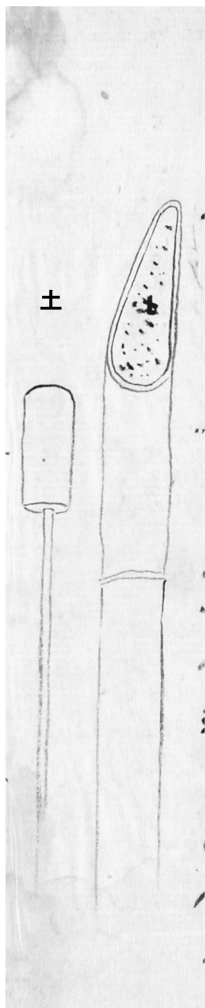
二日計煮る

右の品々搗合、二日二夜計寝せ、猶搗て日に当乾し、もミくたき紛に成りたるを手一つはい握り堅め、手をゆるめたるに、三ツ四つにも割るゝ位のしめりを用、
大術流星簡詰の仕法

○時候ハ四月・八月上時と御左官手の説也、

○詰よふハ右の土乾き過ぬよふ風氣を防き、鶏卵半分たけ位入、槌数七十計たゝく、打様強弱なきよふにすること第一也、樋の漆喰穴土を入るゝ道具、左に顕、

(挿絵十九)



図のとふりそぎ口に土を入、詰口^(差)に指入、送り棒にて搗出す、

○破れ樋詰替ハ三ツ俣のきり、手元ニしもくをはめていきるなり、一日に漸一筋もいきり通す也、

大石運送之事

車も肩持も道の善悪による故、高三尺より後、道十一間まで三十
 一扁丸木詰にて、道幅五尺程の板敷、上エにはねこふく懸是を司る
 事、五兵衛
 八重なんハ、其外種々手を替運送するよし、積り肩持弁利なり、
 付て牛といふ以て
 俣本を以
 推のと、六ツ車五兵衛
 巧也を専用、

築石 長三尺、方一尺八寸已上

同

長二尺五寸、方一尺七寸已上

同 長二尺、方一尺五寸已上

長一尺五寸、方一尺

輪石

隅石 長五尺、方一尺八寸

樋石 三尺方ニ而厚二尺

右の類、肩持には桧五寸角、二間半、夫れに小丸木添、

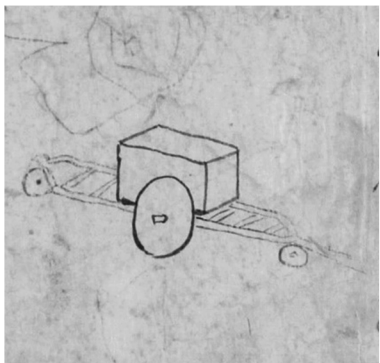
○牛といふ道具、左ニ顕す、

(挿絵二十)



○六つ車、左の図とふり

(挿絵二十一)



前後の小車にて頭を突込むにも却而走り後に当る也、